

# くちなしの花



河村 恵

霧雨に濡れた傘を畳んでいると、クチナシの香りがした。

剛は花には疎いが、春の沈丁花と夏のクチナシの香りだけはわかる。

振り返ると、庭の隅で白い花が静かに咲いていた。

「ただいま」

「お帰りなさい」

妻の麗佳は化粧を落とした顔をして、てきぱきとスーツの水滴を払った。

「クチナシのー」

「すぐ気付くのね、あなた好きでしょ」

「ああ」

風呂を上がると和室の床の間にクチナシの花が活けてあった。

「なんだ、もったいない。庭で咲かせておけばいいのに」

そう口では言いながらも、「雨に濡れずにすんでよかったな」と声を掛けたくなった。

「庭だと、虫がついてしまうから」

「虫か。仕方ないな」

虫と言えば、幼い頃住んでいた家に山椒の木があった。

夏になるとアオムシが食欲旺盛に葉を食べ尽くした。脱皮をくり返し、さなぎになり、アゲハ蝶になって飛び立っていった。

小学校の学級担任がその話をどこから聞き付けたのか、

「理科の時間に観察したいので是非、学校に持ってきてもらいたい」

その翌日。母に虫かごを渡され、アオムシを二、三匹捕まえて学校へ持っていった。

山椒の木の隣には、クチナシの木があった。

教室の後ろに虫かごを置き、毎日、観察日記をつけた。

「尻尾にトゲがある」

日記の「気付いたこと」欄に書くと、大変よくできました、とうハンコをもらった。

その時点で担任も気付くべきだったのではないか。

そのままです黒いさなぎになり、いよいよ羽化した。

授業中、後ろを向いてしゃべっていた男子が声をあげた。

「あ」

ぱらぱらとみんなが虫かごの前に集まった。

「気持ち悪い」

「何これ」

「きれいな色」

そこにいたのは緑色のピロードのような背をした蝉のような蜂のような、見たことのない虫であった。

いずれにしろアゲハ蝶になるというクラスの期待を裏切った姿だった。

後で担任も調べたのだろう。その虫はクチナシの葉につく蛾の一種だ、ということだった。私

は山椒の木ではなく、隣にあったクチナシについた虫を連れてきてしまったようだった。

クラス中に責められた苦い思い出だ。

もう一度振り返りクチナシの花を見た。

その立ち姿は凜とした女性のようにだった。

## 2.

---

夕食をとっていると、麗佳が思い付いたように言った。

「明日は名古屋のお店、手伝いに行ってきますね」

「またか。今回も泊まりなのか。体は大丈夫なのか」

麗佳は曖昧な返事をしただけで、テレビから目を離そうともしない。無反応な様子に一筋の憤りが走った。

「最近、出張が多いぞ。ただの手伝いなんだから無理するな」

「無理なんて、してないわ。雨の中ずっと家の中にいるのも退屈だし」

麗佳はポリポリといい音を立ててたくあんを食べていた。新婚の頃、麗佳はたくあんを音もたてずに食べていたことを思い出した。

その麗佳の後ろの棚に並んでいる手作りの人形たちを改めて見つめた。

麗佳は独身時代に習っていた手芸教室の手伝いをしている。

手伝いと言っても、講師の助手ではない。

手芸教室の講師が、受講生や卒業生の作品のギャラリーと販売店を兼ねた店舗を東京にオープンしたのが三年前の六月。

今年に入り名古屋、京都にも進出した。

麗佳は作品製作補助として始めたが、今ではオリジナル作品も店頭にも並べてもらっているほどだ。タグに「REIKA」と入れてあるだけだが、徐々に売り上げがのびているらしい。刺繍やパッチワーク、人形などを家事の合間に作っている。中でも、人形は得意なようで、せっせと作っているが、リビングのソファに何体も人形が転がっているのを見たときは、ぎょっとした。

もともと、内職感覚で始めたのだが、売れ出すと面白いのだろう。店の販売まで手伝うよう

になっていた。東京店ならまだしも、キャンペーンやセールで人手が足りないと名古屋や京都まで行くこともある。

今まで家のことは麗佳にまかせてあったので、家に帰ってから彼女がいないと何もわからなかった。

剛は帰りが遅くなっても、誘いがなければ大抵まっすぐ家に帰る。

あの日もまっすぐ帰った。門灯が点いていないを見て初めて、麗佳の初めての出張を思い出した。

覚えていれば駅前で食べてきたが、昼間あった仕事のトラブルが一日中頭の中をぐるぐる回り、すっかり忘れていた。

ダイニングテーブルに置かれ麗佳のメモを見て、冷蔵庫のおかずとご飯を温めようとして愕然とした。

レンジの使い方が分からなかった。

去年、麗佳の誕生日プレゼントに購入したオープンレンジは多機能すぎたせいか、どこのキーを押してもぴくりとも動かない。

仕事ではいくらでも大型機械を操作できるのに、なんでこんなちっぽけなレンジに恥をかかされるのか。

納得のいかないまま、煮凝りの浮かんだ冷たい煮物を口に運んだが、食べた気がしなかった。かといって、今更コンビニに買い足しに行くのも癪に障る。

そのままシャワーを浴びて、横になったが、腹がすいて寝付けなかった。

翌日帰宅した麗佳が冷蔵庫に残っていたおかずを見て聞いてきたので、しぶしぶ話すと、申し訳なさそうに謝られた。

そんなことがあったので、麗佳には家にいてほしいが、嬉しそうにしゃべる様子を見ると強くも言えなかった。

翌朝起きると、しっかりと化粧をした麗佳が鏡の前で服を選んでいた。

見たことのないよそゆきである。思わず、「デートにでも行くのか」と訊きそうになった。

「店の手伝いなんだし、おしゃれをすることないだろう。そんな格好じゃあ動きにくいだろ」

振り向きもせず麗佳が応えた。

「お店のイメージってものがあるのよ。販売員の服のセンスも見られるのよ」

出張の度にこのやり取りを繰り返しているような気がする。京都の時はそうでもないが、特に名古屋の出張の時はおしゃれをしてゆくのも気になる。

色白の麗佳の肌が、今日は透けるように白く見えた。

この日も帰ってから麗佳のいないことを思い出した。

灯りのついていない家に入るのはなんとも寂しい。大の男が、といわれるかもしれないが、剛は自他共に認める寂しがり屋である。

幼い頃から、家に帰ると灯りが点いていない時はなかった。いつも母が家にいたし、結婚してからはどんなに帰りが遅くなっても麗佳が必ず迎えに出できた。

だが、店を手伝うようになってからは灯りのついていない家に入らなくてはならなくなった。

ダイニングテーブルに、丁寧な字で書かれたメモがあった。

・レンジの使い方

・お風呂の入れ方

.....

そのメモを見て、五年前、遠距離恋愛をしていた頃を思い出した。

毎週毎週、麗佳はきれいに整った字で手紙をよこした。剛も返事を書いたが、筆不精がたたってうまく書けなかった気がする。よく麗佳に「剛さん、お元気ですか？ お返事がないので心配しております...」という書き出しの手紙をもらった。

あの手紙は、どこへやったのだろう。内容は覚えていないが、控え目で清楚なイメージを麗佳に抱いたことだけは確かである。

その頃と同じ字で「レンジの使い方」が書かれている。

メモに目を通していると、家の電話が鳴った。

麗佳かと思って出ると、若い男の声で「もしもし」と言ったきり無言になり、切れた。

最近いたずら電話が増えているらしい。もっとも、剛は家の電話を取ることは滅多にないので初めてのことである。

こんな寂しい中、麗佳は鼻歌混じりに毎日過ごしているのかと思うと、暢気な奴だ。

もう一度、電話が鳴った。

今度も無言電話だったら怒鳴ってやろう。「もしもし、私よ。帰ってきた？」

麗佳のはしゃいだ声だった。

「ああ」

「メモ気付いた？ テーブルに一」

「今読んでるよ」

メモを無意識のうちに小さく折りたたんでいた。

「悪いけど、それ見ながら自分で作って食べてね。それとも、もう食べてきた？」

「これから作るよ」

「悪いわね」

ちっとも悪くなさそうな声である。

「今日、すごいお客さん入ったのよ」

「売れたのか？」

「ええ、私のも何点か売れたわ」

「よかったな」

急に電話を切りたくなかった。遠く離れた場所から妻のはしゃいだ声を聞いているのが少し嫌になった。

ちょうどその時、電話の向こうで声がした。

「あ、はい。今、電話中なのよ……」

電話口に手を当てているのか、声がかくぐもって聞こえる。

「ごめんねなさい。お客さんが来てるの。もう切るわ。何か変わったこと、ある？」

「別に。あ、明日は帰り何時になる？」

「お昼の新幹線だから、三時ころかしら」

「わかった、気を付けろよ」

「ええ、あなたもね」

足音が近づいてきたところで電話は切れた。

麗佳を呼んだのは低い声だった。男だろうか。

「レイカさん」と呼んでいた。

なぜ、「谷村さん」と呼ばないのか？

確かに、「REIKA」の名で作品を販売しているのだから、自然なことかもしれない。

最近はニックネームで呼び合う会社もあると聞く。少人数で回転している店なら、なおのことだ。

剛は最近、考え方が古いと言われるようになってきた。

頑固だった親父に似てきたのだろうか。血は争えないものである。

剛は、「嫉妬」という字が女偏であることは知っていた。だが、電話の前で立ち尽くしながら想像してしまった。

手芸店で女の店員に混じって動き回る麗佳は小柄だが、人一倍はしゃいでいた。

そこに男の店員が一人入ると、もういけない。ますますはしゃいで、花が咲き狂ったようになる。

剛は、自分とは正反対な容姿の男の隣に麗佳を並べてみた。

その男は血色が悪く、痩せ気味。背だけ高くてやや猫背だ。

背が低く色白の、背伸びをするような姿勢をした麗佳とは釣り合いがとれない。そこまで思い浮かべ気持ちを抑えた。

東京店オープン当日の写真がリビングのコルクボードに貼ってある。

店の概観と、店員たちの集合写真。

十人ばかり、女だらけで写っていた。

みんな眩しそうに目を細めている中、麗佳は一人だけ、やたら嬉しそうに笑っていた。

麗佳は、一つのことを始めると、のめりこんでいくところがある。

料理、弓道、華道、手芸と熱中してきたが、飽きると怖いくらいにあっさりと次に移っていく。

手芸は結婚して一度は冷めたのだが、店のオープンの話を聞いてから熱が戻った。

いずれ飽きて、きっぱりやめると思うが、始めてからもう三年が過ぎようとしている。

麗佳にしては長く続いている。

製作の仕事なら家でもできるし、小遣い稼ぎにもなっていると思ったのだが、こう泊まりの出張が多いのは見込み違いであった。

実家に帰ると、「麗佳さんもお仕事お忙しいみたいだけど、そろそろ考えたほうがいいんじゃないかしら。孫の顔も見たいし」、と言われるのが億劫だ。

新婚の頃、子供は五人欲しいと言っていたが、麗佳ももう四十に手が届こうとしている。五人どころか欲しいとも言わなくなっていた。

それも、手芸を始めてからである。

よからぬことを想像し始めると居ても立ってもいられなくなった。小さな寝息をたたえている麗佳の隣で眠れない夜を過ごした。

思い切って名古屋の店に行ってみることにした。

朝は普段通りに家を出た。

新幹線に乗るのは久しぶりだった。車内で名古屋店の店舗情報を調べた。ホームページには簡単なアクセスマップと店舗の外観の写真、その下に連絡先と営業時間が書いてあるだけだった。

名古屋駅を降りると、まだ開店まで時間がある。

駅ビルの一階で雑誌を買い、コーヒーを飲んで時間をつぶした。

会社へは病欠の連絡を入れてあるが、つい、メールのチェックをしてしまう。

取引先からのメールが数十件入っている。一時間もすれば、同じチームの林が処理してくれるだろう。

会社をサボるのは初めてだった。学校でさえサボったことのない剛は落ち着かなかった。

ここまで来たものの、店へ着いてからのことは何も考えていない。

地図通りに行くとながらすぐに店についた。

中を見ると女の店員が二人、商品の配置を相談しているようだった。声は聞こえないが笑いながら楽しそうな雰囲気が見えた。客はまだ入っていない。剛は店の前をそのまま通り過ぎようとした。

店の前に「ご自由にお取りください」と書かれた透明のプラスチックの箱があったので、中から一部取り出した。

近くの公園のベンチに腰掛けて開いて見ると手芸教室と店の紹介パンフレットだった。

先日のセールのご案内もはさまれていた。セール期間中は夜十時までというのも麗佳の言うとおりのりだった。

スタッフの写真や教室の風景写真、主な作品と作家のコメントが載っていた。

スタッフは女だらけだった。店長も若い女性だ。

下の方にスタッフ随時募集と書いてあったので電話してみた。

「うちは現在、女性スタッフしかおりませんので、申し訳ございませんが男性の方には働きにくいと思います」と言われてしまった。

名古屋店に男性店員がないとは予想外であった。ここまで来て拍子抜けした気分である。納得がいかないままいると、腹の虫が鳴った。

味噌カツかひつまぶしか迷った挙句、味噌カツにした。老舗らしい店構えの戸をあけると十二時前なのにほぼ満席だった。

少し待ってから席を案内された。名古屋に知り合いはいないが、店内に顔見知りはいないか確認してしまう。

昼過ぎに手芸店に入ってみた。

朝いた店員がカウンターに並んで立っておしゃべりをしている。

剛が入ると「いらっしゃいませ」とほほ笑んできた。化粧は濃いだが、感じのいい笑顔である。

REIKAのコーナーを見ていると、後から数名の女性客が入って来た。主婦や学生のグループのようだ。

店員の一人が近づいてきた。香水がきつい。

「この作品の作家も卒業生？」

「はい。先日はこちらにいらしてたんですけど、いつもは東京にいらっしゃいます」

「ふん」

店の奥に店員のシフト表が見えた。

「男はいないの？」

「え、ああ。お教室に来られる方も女性ばかりでして、お店の方も今のところはおりませんね。体験入学もございますのでよろしければ」

「いや、ただ・・・」

シフト表には麗佳の名前もある。が、男らしい名前はなかった。やはり男性店員はいないよう  
だと思った。

剛の腑に落ちない表情に、女性店員は怪訝な視線を向けてきた。

「なにか？」

その時、もう一人の店員が早足で近づいてきて耳打ちした。

「ともこさん、例のお客様が」

剛は「ありがとう」と言って店を出た。

駅に向かい、東京行の新幹線に乗った。会社をサボってまで名古屋に来たことがばかばかしく  
思え、深くため息をついた。

その足で東京の店に寄ってみることにした。

店は駅前の道を一本入ったところにある。

今日は18時の閉店までいるはずだ。

剛の時計は17時43分を指している。

店に来るのは三度目だ。

最初は二人で下見に来た。次は、働き始めて一ヶ月くらいした頃だった。仕事でちょうど近くを通ったから、と嘘をついて一緒に食事をした。

あの頃と少し変わっていた。

和菓子屋とケーキ屋に挟まれているから、店の左半分は和風の小物を、右半分には洋風の人形やパッチワークキルトなどを並べているのよ、と麗佳が説明していたが、そのケーキ屋は靴屋に変わっていた。

店のウィンドウには、「REIKA」の人形が座っていた。

「ありがとうございましたっ」

元気のいい声がして、店の中から外国人のカップルと、エプロンをつけた店員が出てきた。

麗佳である。

「あ」

「どうしたの？」

珍しいものでも見るような目つきをしている。

「仕事が早く終わったから、たまには寄ってみようかな、と」

大またで近づきながら、

「妻の働いている様子を偵察しに来たのね」

「そんな」

麗佳は楽しそうに笑った。家で見るとよりいきいきとしている。

中に入ると、中央にあるテーブルには花の刺繍をあしらったパッチワークのテーブルクロスがかかり、麗佳の人形が不思議そうな表情で並んでいた。

その目は、なにか隠し事でもしているような、どこまでも黒い目だった。

他にも何か置いてあったはずなのだが、思い出せない。

ただ、麗佳の作品ばかりがいい位置をしめているのが少し気になった。

「さっきの外国人のカップルはこれを買っていったわ」

そう言って、着物の帯を使って縫い合わせたタペストリーを指差した。

「お土産にするんだって。こういうの好きみたいね。ウアオ、ビューテフル！って言っていたわ。でも、日本人はもっぱらこっちを買っていくわ」

麗佳の左手は人形の頭を撫でていた。

「これ、先月作っていた人形よ。こうして見るとなかなかでしょ」

「ほら、見て。このスカートの刺繍、一一」

ふと、麗佳が他人に感じた。

いつの間にかおばさんっぽくなっている。以前は、こんなに自分の主張をすることはなかった。

常に、剛から一歩さがってついて歩き、どこに行っても剛を立てていた。それが麗佳であり、一生変わらぬものと思い、薬指にリングをはめた。

だが、一歩後ろを歩くことに疲れたのか振り向くと、寄り道などして楽しんでいた。

剛の先を越すことだけは許されない。しかし、時には走ってみたい。その不満が、今こうして中央のテーブルに、自分の身代わりとしての人形を置かせているのかもしれない。そう思うと、麗佳に少し悪いことをした気になった。

店の奥から男が出てきた。

「店長の林さんよ。林さん、夫です」

男は早足でこちらに近づいた。

「いつもお世話になっております」

「こちらこそ。奥様の活躍には私どもも大変助かっています。センスも抜群で素晴らしい奥様ですね」

癖のある話し方が耳についた。

男は四十代前半と言ったところだろうか。色黒でがっしりとした体格である。手芸というよりスポーツをしていそうな男だった。

他の店員を見ても名古屋店のような派手な店員はいなかった。

いつの間にか、蛍の光が流れていた。

「せっかくだから、向かいのお店で食事して帰りましょうよ」

向かいには中華料理店があった。

麗佳がよくランチに行く店だ。杏仁豆腐がおいしいらしい。

中華料理を食べに行っ、杏仁豆腐がおいしいのはいいが、料理はどうなのか、と訊くと、麗佳は、

「全部おいしい」

と曖昧になる。

まさかランチに杏仁豆腐だけしか食べていないわけではないだろう。問い詰めると、

「チャーハンを食べてる」

「高くてそれしか頼めない」

と応える。

銀座という場所柄、どこも高く、と言われるとさすがに可愛そうに思えた。

弁当でも持っていったらいい、と言うと、

「私だけそんな...」

とうつむく。

家計が苦しいわけではない。稼ぎに行っているんだし、そんなにぎちぎちと節約することはない。

それを聞いて安心したのが、麗佳はぱっと顔をあげて口を開いた。

結婚し、家計を任されたときの剛の言葉が引っかかっていたと言う。

一に節約、二に節約、三に愛情...

家計簿のノートに書かされたという。

そんな覚えはないが、そのノートを見せられて気恥ずかしくなった。

ノートの一ページ目に大きく書いてある。その下には、剛と麗佳のサインまである。

この一言を忠実に守ってきた麗佳がいとおしく思えた。だからこそ、言うべきことがあった。

「その代わりに」

剛は少し間を置いて、呼吸を整えた。

「出張はやめろ」

「え」という顔のまま、麗佳は動きを止めた。

「でも、出張費は出るわ」

「出張の度に外食、服代、土産代がかかるだろ」

麗佳は気付かれていないつもりでも、いつも東京土産と言って、剛の食べたことのないような菓子を持っていくのを剛は知っていた。もちろん、土産代はたかが知れている。それ以上に、よそゆきの服がその度ごとに増えていくのはいつか注意しなければ、と思っていた。

「それに、店の手伝いでなんで泊まりの出張になるんだ？」

「そうね。やめるわ」

あっさりと承諾されて、今度は剛が驚かされた。名古屋に男がいるという疑いは思い違いだったのだろうか。

剛は、安心していいのかわからなくなった。正直なところ、妻の秘密を暴けずにつまらなさも感じた。

困惑したり、涙ながらに謝ったり、そういうことを心の奥底では望んでいたことに気付いた。

夜になるとクチナシが強く香った。

風呂をあがるとリビングから麗佳の声が聞こえる。

ドアを開けると、ほぼ同時に、じゃあね、といって受話器を置き、受話器についた汗を手でそっと拭った。慣れた手つきである。

「友達からよ、大学時代の。今度、東京に出てくるからうちに寄りたいって」

「ふん」

よくすらすらと嘘が出てくるものだと思った。例の男に、もう逢えない、とでも話したのだろうか。それとも、東京へ呼び出してまた逢うつもりだろうか。麗佳の澄ました表情からは何も読み取れなかった。

「あなた、私に何か隠してない？」

麗佳はまっすぐ目を見てきた。

「責めるつもりはないけど、今日、会社行ってないでしょ」

ドキリとして、思わず強い口調になった。

「悪いか」

「いえ、なにかあったのかと」

「隠し事しているのはお前の方だろう」と言いたいのを我慢した。

飲んだせいか、むらむらと怒りの回りも速いようだ。

麗佳が風呂に入っている間、彼女の部屋に入った。

ひんやりとして、他人の部屋のようにだった。お互いの部屋には入らないきまりがあったのだ。

ブルー系でまとめられたコーディネートは、いかにも麗佳らしい。

キッチンだとどこに何があるのかわからないが、麗佳の部屋は何となく察しがついた。

いつも使っている黒いバッグの中には手帳があり、机の左側の引き出しには大切なものが入れてあるはずだ。

思ったとおり、手帳が見つかった。

落ち着いた渋みのある赤いカバーがかけられている。

開くと、びっしりと予定が書き込まれていた。ほとんどが手芸の予定である。

もともとまめな性質だが、手帳をせっかく買ったのに書き込むことがない。そこでうんと背伸びをして忙しいように書いている、そんな感じだった。

もし、本人に聞いたとしても同じような応えが返ってくるような気がする。背伸びをしても、しっばなしではない。ちょっとした理由をつけて、背伸びをしている自分を一緒になって可笑しそうに笑う。

誰もがそうであるように、麗佳も裏と表を持っている。ただ違うのは、見せてと言えば、待っていたかのようにするすると裏の姿を見せてくれる。だからこそ、今までは憎めなかったのだ。

手帳の隅に浮気相手の名前を一字とって小さく書き込む、とドラマか何かで見たことがある。

「つよし」なら、「ツ」とだけ書くのである。そのドラマでは「保一（ヤスカズ）」の漢字読みから「ホ」と書いていた。「ホってなんなんだ？」と問い詰める暴力的な夫に「保険の振込みよ」と、さらりと言ったのけた妻の姿に女の怖さを見た。

だが、麗佳の手帳にはそういった怪しい書き込みは、ない。

閉じようとしたとき、手帳カバーのポケットに紙が折りたたまれているのが見えた。

「保坂裕美」

麗佳の字ではない。若く、落ち着きのない字だった。

紙には連絡先が書かれているわけでもなく、ただ名前が書かれているだけだった。

「裕美」という名前が男女両用のものであることを知ったのは最近だ。

「保坂裕美」が男性かどうかは判らない。

またしても決定的な証拠をつかめずにいらいらしていた。

机の引き出しにはミニアルバムが入っていた。

表には「2010年6月～」と書かれている。

開くと一ページ目には、リビングのコルクボードと同じ写真が入っていた。

アルバムのメモ欄には、「東京店6月」に続き、「名古屋店」とあった。十名ほどのメンバーの中には、麗佳のように手伝いで行ったのだろう、東京店と重複して写っている女性もいた。

その写真に、男が二人いた。名古屋店のパンフレットには写っていなかった二人である。

一人は今日紹介された林店長。そういえば、あのしゃべり方は、訛りを抑えようとしていたものなのかもしれない。名古屋から引き抜かれて東京で店長になったのだろう。

もう一人は高校を卒業したて、といった感じのかわいらしい男の子だ。ふくよかな女性の隣で写真に入ろうと体をよじて写っている。

「まさか、この男が」

じっくり見ようとしたとき、風呂場のドアの音がした。

麗佳が風呂をあがったようだ。

アルバムをもとの位置に戻し、自分の部屋に戻った。

あの若い男だとしても、もう店を辞めているはずだ。そもそも麗佳は年下の男性は苦手だと言っていたではないか。

それに、名古屋の店員は少し派手でおしゃれだったから、それに合わせていたのか。

麗佳の言うことに他意はないのかもしれない、という考えが初めて湧いてきた。

その夜、確かめるように麗佳を抱いて寝た。久しぶりの気がする。

体が、やわらかかった。

出張がなくなると、麗佳はあまりはしゃいだ様子を見せなくなった。

やはり、と思った。

「裕美と言う名前、男でもいるんだな」

帰るや否や言うと麗佳は眉をぴくりと動かした。

「そうですか。珍しいですね」

「ああ」

黙っていると、沈黙に耐えられなくなったように口を開いた。

「急に、どうしたんです？」

カバンを受け取りながら、目を伏せていた。店にあった人形に似ていた。

「今日会った取引先の担当者が、男なのに「裕美」と名乗るから、ちょっとびっくりしてね」

麗佳はスーツを脱がせに背中に回ったが、困惑した表情は鏡に写っていた。

横になり、雨音に耳を傾けていた。

ふと思いついたことがある。

麗佳はクチナシの花に似ている。

梅雨の時期、ぱっと白く明るい顔をしている花があると思うとクチナシである。

日中は可憐な少女のような顔をしているが、夜になると甘い香りが強くなる。虫を呼び寄せ、受粉させるためだそうだ。

実際には受粉する為以外にも蛾の幼虫まで呼び寄せてしまう。そしてその虫に葉を食べられ、丸坊主になっても涼しい顔で咲き続ける。

次第に花びらが黄色くなり、橙色の実をつける。

クチナシの名は、その実が開裂しないのでつけられたと聞いたことがある。

麗佳も、男がつきやすいところがある。

学生時代からの付き合いだが、しつこく言い寄ってくる男がけっこういたようだった。本人はあっさりとして断って澄ましていたというのは、後で友人に聞いた話である。

夫として、それは一種の誇りでもあった。もちろん、自分のもとに戻ってくればの話だが。

麗佳は何があっても剛の前では涼しい顔で、静かに終らせていたようだった。

あれから、どれくらいが過ぎたのだろう。

東京で例年より早い初雪が降った日だった。

帰宅すると玄関で、おかえりなさい、の次に、「できた」と言った。

「何が？」

急に言われても解らなかった。

すると、麗佳は、照れたように自分のおなかをさすった。

あやうく「俺のか？」と言いそうになった。

もうずいぶん前のことである。

頭の中で軽く計算し、あのむらむらと嫉妬に狂っていたのは一年以上も前だったことがわかる  
とようやく言葉が出  
た。

「本当か？ 病院に行ったのか？」

こっくりと頷き、はしゃいだ表情になった。

この表情を見るのは久しぶりで、嬉しかった。

「明日からお店の手伝い、やめるわ」

きっと、手帳に挟んであった紙も捨てたのだろう。

リビングに飾ってあった人形たちも綺麗に消えていた。その代わりに、作りかけのぬいぐるみが  
丁寧に置かれていた。それは優しい表情だった。

それからは、一切、店の話を口にしなくなった。

もう一度、麗佳の手帳を見たい気もしたが、やめておいた。自分の子どもを孕んだ女を疑って何になると言うのだ。

そして、クチナシの咲く日に、麗佳は女の子を産んだ。

名前は、「凜」とした。

## くちなしの花

<http://p.booklog.jp/book/72538>

著者：河村 恵

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/p-lily/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/72538>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/72538>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ